



日本の錢貨の鉛同位体比分析
Comprehensive Lead Isotope Analysis of Japanese Coins
Issued in Nara to Yedo Periods

齋藤 努

はじめに

① 資料

② 分析方法

③ 結果と考察

まとめ

【論文要旨】

本共同研究において「高周波加熱分離-鉛同位体比測定法」が新たに開発された。この分析方法の特徴は、操作が単純で、低ブランクで非常に迅速に鉛の分離・測定ができることである。測定値標準化用試料を用いた分析データの比較では、従来法と新法の示す数値はよく一致しており、この方法の有用性が認められた。これは、時に多数の試料を分析しなければならない歴史資料にはきわめて適した方法であるといえる。

この方法を用いて、古代から中世、近世に至る日本の錢貨を対象に、網羅的な分析を行い、原料鉛の産地について解析を行った。錢貨の測定点数は古代錢貨（皇朝十二錢）74点、中世錢貨106点、近世錢貨100点である。この結果、以下の知見が得られた。

1. 皇朝十二錢では、日本産の原料鉛が使用され、またその大部分は長登鉱山周辺産と推定される。
2. 中世錢貨では、原料の鉛は、14世紀頃は中国産であったものがしだいに国産の原料へと移行し、15世紀頃以降は中国産原料はほとんど見られなくなるが、一部中国以外の海外産と思われる原料も使用される。
3. 近世錢では、原料として国産の鉛が使用された。原料供給のおおまかな状況としては、前段階では基本的に近隣の鉱山から行われ、のち次第に東北地方などの鉛に移行していくという傾向がみとれる。ただし、文錢、長崎貿易錢など一括供給していたと考えられるものもある。